

Buddha statues from the Heian period, the  
Kamakura period, and the Northern and Southern  
Dynasties in the Enshu region

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島口, 直弥, 大宮, 康男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00028507">https://doi.org/10.14945/00028507</a>

## 遠州地域に伝わる平安・鎌倉・南北朝時代の仏像

Buddha statues from the Heian period, the Kamakura period, and the Northern and Southern Dynasties  
in the Enshu region

島口 直弥<sup>1</sup>, 大宮 康男<sup>2</sup>

Naoya SHIMAGUCHI, Yasuo OMIYA

(令和3年11月30日受理)

### ABSTRACT

The Buddha statue exhibition “Mihotoke No Kiseki” was held at Hamamatsu Municipal Museum of Art. I conducted research and study on Buddhist statues in the Enshu area for the Exhibition. In this paper, I summarize the characteristics of them introduced in this exhibition. I confirm the value and the significance of each of them. I consider about how Buddhist culture was transmitted from Nara, Kyoto to this area and how Buddhist culture spread in this area.

### 1. はじめに

遠州地域には、浜松市の摩訶耶寺、湖西市の応賀寺、袋井市の西楽寺等、奈良時代開創の古刹が多く残る。これらの寺院に伝わる仏像には、制作時期を平安時代や鎌倉時代にまで遡るもの、重要文化財や静岡県指定文化財として歴史的・文化的な価値が認められるものも少なくない。しかし、遠州地域の仏像に関する研究は発展途上であり、市民にもその存在や価値が浸透しているとは言えない現状がある。そこで筆者<sup>1</sup>は、令和3年春、遠州地域の貴重な仏像の存在や価値をより多くの市民に周知すべく、学芸員として勤務する浜松市美術館にて「みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展ー」（以下「みほとけ展」）を企画・開催した（図1）<sup>1)</sup>。

遠州地域にいにしえから伝わる優れた仏像が残る背景の1つに、遠州地域がかつて属した遠江国に都から伝播した仏教文化が、人々に受容され広く浸透したことがあげられる。遠江国府が置かれたのは現在の磐田市で、「国分寺建立の詔」（『続日本紀』天平13年〔741〕）により国分寺も造立された。全国各地へと伝播した仏教文化は、まず都との直接的な交流のある国府や国分寺等に伝播した後、そこを基点に周辺の各地域へと広まったものと推察され、地域に伝わる優れた仏像の存在はまさにその証と言えよう。



図1 みほとけ展会場風景

本論では、遠州地域に伝わる平安・鎌倉・南北朝時代の仏像に焦点をあて、「みほとけ展」に向けた調査・研究の成果<sup>2)</sup>のもと、各像の特徴から遠州地域に伝わる仏像の傾向を整理する。また、遠州地域の歴史的・文化的な背景、地理的条件や周辺地域とのつながり等、様々な事情

<sup>1</sup> 浜松市教育委員会・浜松市美術館

<sup>2</sup> 美術教育系列

を考慮しながら、遠州地域における仏教文化の伝播やその広がりの様相を考察する。さらに、研究途上である遠州地域の仏像を考える上での新たな視点や課題を見出し提案したい。

## 2. 遠州地域に伝わる主な仏像

遠州地域に伝わる仏像を概観すると、平安時代中期の制作で平安時代前期からの古様を示す作例、平安時代後期に全国的に流行した定朝様式を示す作例、鎌倉時代の慶派や南北朝時代の院派等の各仏師集団による作例等、各時代を彩った作例を満遍なく確認することができる。ここではまず、遠州地域に伝わる仏像の中から特筆すべき仏像を取り上げ、その特徴を確認する。

### (1) 平安時代の古様を示す仏像

遠州地域において、飛鳥時代の金銅仏、奈良時代の脱乾漆造や木心乾漆造、奈良時代から平安時代前期にかけての木彫像の存在は、現在のところ確認されていない。<sup>3)</sup> 10世紀の制作と推定される摩訶耶寺の千手観音立像が、遠州地域に残る最古の木彫像の1つとされる。平安時代以降、仏像の材料には神や霊が宿ると考えられた木が多用されるようになる。その結果、平安時代前期には、造形力が高く美しい一木造の仏像が多く制作されるようになった。加えて、一木造の仏像の材料として、カヤを用いることが全国的に広がった。<sup>4)</sup> 摩訶耶寺像はそれらの作例よりも時代が降る10世紀の制作であるが、カヤと見られる針葉樹の一木から彫り出された像である。カヤをはじめ、一木造の仏像の材料に適した大木が豊富な遠州地域の自然が生み出した像といえるかもしれない。

摩訶耶寺像は、頂上仏面から足先までの頭体幹部を一材から彫り出している。脇手は別材を寄せているが、本体との矧目、像全体のバランスに違和感はなく、制作当初のものと考えられる。一木造に起因する重量感がある一方、腰周りには引き締まった括れを見せ、女性的な美しさを感じさせる。脚部には、やや形式化しているものの翻波式衣文が見られる他、当初は頭体幹部と台座（現在の台座は江戸時代の後補）の連肉までを一材から彫り出していた可能性も指摘されており<sup>5)</sup>、平安時代前期から中期にかけての仏教彫刻の古様を窺い知ることができる。（図2）



図2 千手観音立像（摩訶耶寺）

西楽寺の日光菩薩立像・月光菩薩立像は、薬師如来坐像の両脇侍として、薬師堂に安置されている。ところが、定朝様式を示し12世紀の制作と推定される中尊に対し、日光菩薩立像・月光菩薩立像は像高が非常に高く、この三尊が当初から一具を成していたとは考えにくい。両像とも頭体幹部を針葉樹と思われる一木から彫り出しており、全体として重量感を感じさせる体躯である。背割りを施したのち背板を矧ぐ点も古様である。面長且つ豊満な頬の肉付き、環状としない耳朶に流れるように掛かる鬢髪の鑄の立ち方等、摩訶耶寺像の千手観音立像との類似点を指摘することができ、その制作時期は10世紀まで遡る可能性がある。

光禅寺の大日如来坐像は、定印を結んで結跏趺坐する等身大の胎藏界大日如来である。頭体幹部をヒノキと見られる針葉樹の一材から彫り出しており、膝前には横一材を寄せている。後頭部と背面、膝前の横一材の底面にわずかに内割りが施され、古様な構造を示す。肉付けはやや控えめで、面長な面相部も相まって、一木造ならではの重量感はあまり感じさせないが、腹部の側面観に厚みが見て取れる。脚部の衣文は形式化しているものの、衣文線の彫りの深さや幅の広さに平安時代前期からの潮流が残り、10世紀頃の制作と推定される。旧浜松市内に残る現存最古の木彫像である。<sup>6)</sup>

その他、旧浜松市内では、現存こそしていないものの、竜禅寺に一木造の千手観音立像が伝

わっていた。重量感のある体軀やくっきりとした目鼻立ちにも平安時代中期の古様が垣間見え、10世紀の制作と推定される。<sup>7)</sup>

### (2) 数多く伝わる定朝様式の仏像

遠州地域には、平安時代後期に全国的な流行をみせる定朝様式を踏襲した仏像が多く伝わっている。<sup>8)</sup> また、浜松市の摩訶耶寺、湖西市の応賀寺、袋井市の西楽寺、磐田市の宣光寺等、遠州地域全域に満遍なく分布しているといえる。

応賀寺の阿弥陀如来坐像は、穏やかな表情で結跏趺坐し定印を結ぶ。薄く平坦な体つきや流麗で浅い衣文の表現、細かく整った粒立ちの螺髪表現等から、正統的な定朝様式を踏襲した作例と言える。光背の頭光部と光脚部に当初部分が残りに、そこに配された文様は流麗である。正統的な定朝様式を見事に表現した像本体の優美さ、内削りに見られるノミの丁寧な彫跡、光背に残る当初部分の繊細な表現から、応賀寺



図3 阿弥陀如来坐像と光背（応賀寺）

像が中央の正統的な流れを汲んだ仏師の手によって制作されたことを想像せざるを得ない。遠州地域を代表する都ぶりの作例といえる。(図3)

西楽寺の薬師如来坐像は、左臂を曲げて前方に差出し、掌に薬壺を載せる薬師如来の典型的な姿を見せる。浅い彫りの衣文の表現や薄く平たい体軀に定朝様式の踏襲が伺えるが、上唇を強く前方に突き出したクセのある顔立ち、やや大きく粒立ちの粗い螺髪表現、割剃造でありながら割首を行わない古様な構造等をふまえると、地方仏師による作例であると考えられる。定朝様式の地方における受容の在り方の一端を垣間見ることができる作例である。

宣光寺の地藏菩薩坐像は、江戸時代に施されたと見られる彩色が目立つが、像内に永暦元年(1160)に仏師讃岐の手によって造像されたとの墨書銘が残る基準作として貴重である。流麗な衣文表現や穏やかな表情を浮かべる面相部等から、この地域への定朝様式の伝播を物語る一例と言える。また、銘文に「檀越等大判官代他田助 并諸檀那有之」とあり、檀越として「大判官代」(地方で現地採用された官人で在地の有力者・在庁官人)が記されており、正統的な定朝様式の仏像を、この時代に地方の在庁官人級の人物が受容できた背景を考慮すべきとの指摘がある。<sup>9)</sup>

### (3) 時代の先端をいく仏像

西楽寺の阿弥陀如来坐像は、両脇侍に観音菩薩・勢至菩薩を従え来迎形式を示す。中尊の胎内に正応3年(1129)の修理銘、両脇侍の胎内に阿弥陀来迎には従う二十五菩薩の尊名の墨書が確認されている。(図4)<sup>10)</sup>

特筆されるのが、正統的な定朝様式を示す12世紀の像に、彫刻の写実性を追求する目的で考え出され、鎌倉時代に全国的な流行をみせた玉眼が嵌入される点である。玉眼像の最も早い作例は、仁平元年(1151)作の長岳寺の阿弥陀如来及び両脇侍坐像であることが知られる。従って、長岳寺像の存在が、西楽寺像の制作年代の上限を決定する手掛かりとなり得る。<sup>11)</sup>



図4 阿弥陀如来坐像（西楽寺）

長岳寺像の作者として、康助や康慶の名前があがっている。衣文の線の配置は定朝様式を基本としつつも、深く動的な彫り、脇侍の帯状布を腰に巻く形式等、鎌倉時代へつながる要素が多く見受けられる。平安時代後期における中央仏師による新たな表現への試みを感じられる仏像と言える。<sup>12)</sup> それに対し西楽寺像は、流麗な衣文線とその彫りの浅さ、薄く平坦な体軀から定朝様式を堅実に踏襲しようとしたものと見られる。膝部に舌状の衲衣を垂らす形式は、浄瑠璃寺の九体阿弥陀如来坐像のうちの4軀、三千院の阿弥陀如来及両脇侍坐像等に認められ、来迎形式の阿弥陀如来坐像に多く見られるものとされる。<sup>13)</sup>

西楽寺像の玉眼が当初であるか後補であるかは議論の余地があるが、後補だとしても当初の在り方を継承している可能性もある。<sup>14)</sup> いずれにせよ、正統的な定朝様式を示す仏像に対して、玉眼の嵌入という新たな時代を先駆けた技法を施す点に、地方における定朝様式から鎌倉彫刻への過渡期を見出すことができよう。

12世紀の玉眼像の例として、運慶が安元2年(1176)に完成させた円成寺の大日如来像、仁安年間(1166-1169)の創立と考えられる七寺の阿弥陀如来及び両脇侍坐像(中尊は太平洋戦争の空襲で焼失)等があげられる。<sup>15)</sup> また、奥州藤原氏2代基衡によって建立され、保元2年[1157])には完成していたと考えられる毛越寺金堂に玉眼像が安置されていたとの記録(『吾妻鏡』文治5年[1189]9月17日条に「寺塔已下注文」という平泉の諸寺に関する記録が引用されている。)があることから<sup>16)</sup>、12世紀後半には玉眼像を既を受容していた地域が全国に点在していた可能性がある。西楽寺の定朝様式の玉眼像の存在は、遠州地域が当時の流行の先端をいく文化を比較的早い段階から受容可能であったことを物語るもので、非常に興味深い。

#### (4) 中央仏師制作の仏像

岩水寺の地藏菩薩立像は、像内から発見された造像記に「仏子法橋聖人位運覚／北京於六波羅蜜寺造立之」とあり、仏師・運覚によって建保5年(1217)に六波羅蜜寺で制作されたことが明らかになった。運覚の前名は円慶で、運慶を大仏師とした東寺講堂諸尊像修理(建久8年[1197])に参加する等、慶派の有力仏師だったとされる。<sup>17)</sup>

岩水寺の地藏菩薩立像は、裸形着装像であることが特筆される。裸形着装像とは、文字通り裸の姿に彫られた像に実際の衣を着装している仏像のことである。それらの多くが鎌倉時代に制作されたものであり、裸形着装像が鎌倉時代に一世を風靡したことが伺える。裸形着装像の制作には特殊な技法が用いられることがあり、岩水寺像は、歯や足指の爪が水晶で作られたり、口腔内に木製の舌を取り付けたりする点が注目される。裸形着装像について、衣文を彫刻する代わりに実物の衣を纏わせることは、木彫像の「行き過ぎ」や「限界」として語られることが多い。しかし、衣を纏わせ特殊な技法を用いることで像を「生身化」させ、人々の願いを届けさせるようとする意図があったとの指摘もある。<sup>18・19)</sup>

方広寺の釈迦如来及び両脇侍坐像は、院派仏師の院吉、その子息の院広、院遵によって制作されたものである。面幅が広く四角形の頭部、うつむき気味の背格好、目尻の上がった切れ長の目、脚部のうねる様な衣文等、院派仏師特有の作風がよく表れている。<sup>20)</sup> 金泥彩の上に、盛上彩色や切金文様がよく残る点にも美しさが見て取れる。

#### (5) 移動する仏像の存在

方広寺の釈迦如来及び両脇侍坐像は、もとは清音寺(茨城県東茨城郡)の本尊である。江戸時代、清音寺を訪れた徳川光圀の命で修理された旨が背面に明記されており、地域で篤い信仰を集めてきた。明治時代、清音寺と方広寺が共に臨済宗南禅寺派に属していたことをきっかけに、方広寺側の懇請によって移されたとされるが、真相は定かではない。<sup>21)</sup>

応賀寺の阿弥陀如来坐像は、神仏分離に端を発した廃仏毀釈で荒廃した舘山寺から明治4(1872)に移されたものである。舘山寺は浜名湖の一部である内浦湾西側の半島の斜面に位置

し、『東海道名所図会』（寛政9年〔1797〕・図5）によれば、浜名湖の湖面（内浦）に向かって堂が東面して建てられているように見えることから、かつて本像を安置する阿弥陀堂が存在し、湖面を浄土教庭園の池に見立てていた可能性が指摘される。<sup>22)</sup> 浜名湖を中心とした文化圏内における寺院同士の交流や仏像の移動の一例といえる。

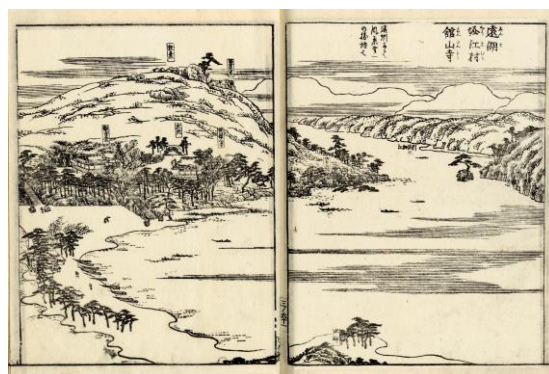


図5 『東海道名所図会』 館山寺（浜松市中央図書館蔵）

秋葉寺の金剛力士立像は、現在の愛知県新城市巢山から明治時代に移されたものである。

像内の銘文に「寛元」の文字が確認されることから、その制作を鎌倉時代にまで遡る作例であり、現在知られる鎌倉時代（13世紀前期）の金剛力士立像の在銘基準作として、東大寺南大門の金剛力士立像（建仁3年〔1203〕・運慶、快慶、湛慶、定覚等作）、石龕寺の金剛力士立像（仁治3年〔1242〕）に次ぐものである。秋葉寺像があった巢山の熊野神社には、慶派仏師・行慶作の阿弥陀如来坐像（寛元2年〔1244〕）や、同じく慶派仏師・鏡慶作の聖観音坐像の存在が知られる。秋葉寺の金剛力士立像は、これらの諸像と一連の作である可能性が指摘されている。<sup>23)</sup>

仏像の中には、「寺院の外護者となる地域の政治権力との関わり」、「地域の政治権力の再編に伴う寺院の没落や廃絶」、「信仰の場の断絶後の需要」、「神仏分離による信仰の場の断絶」等、様々な要因で当初の安置場所から移動をしているものがある。<sup>24)</sup> ここで取り上げた例は全て明治時代のものであり、遠州地域に伝わる仏像で、古代・中世等に移動したことが分かっている仏像の存在は現時点では確認できない。しかし、仏像の移動は、寺社と諸勢力との争いや寺院を保護する地域の有力者の移り変わりによって仏像の破損、廃棄、亡失等の事態が起こり得た古代・中世等においても頻繁に行われたと想像される。

### 3. 遠州地域の仏像の傾向と仏教文化の伝播・広がり

#### (1) 平安時代中期以前

遠州地域最古の木彫像は10世紀のもので、摩訶耶寺の千手観音立像、光禪寺の大日如来坐像、西楽寺の日光・月光菩薩立像をあげることができるが、現在に伝わっている数は多くはなく、それ以前の作例は確認できない。しかし、これら平安時代中期の仏像が伝わる地域の周辺には、それ以前の遠州地域の仏教文化の栄華を示す遺構や痕跡を数多く確認することができる。

摩訶耶寺の位置する現在の浜松市北区三ヶ日は、その山中から奈良時代から平安時代前期にかけて制作されたと見られる瓦塔（奈良国立博物館所蔵）が発掘されたことで知られる。この瓦塔は、相輪、屋根、軸、基壇の四部分から構成される五重塔で、別材で柵状の部材を作り、裳階を表現している点、初層内部の内陣に見立てた箱の表面に仏像を浮き彫りにしている点等、細部の精緻な表現が特筆される。平安時代前期以前の、浜名湖を望む遠州地域北部の仏教文化の栄華を示す品といえる。<sup>25)</sup>

西楽寺の位置する袋井市の東隣の磐田市には、律令制のもと国分寺が置かれたことが広く知られる。遠江国分寺は弘仁10年（819）に、相模や飛騨の国分寺とともに火災にあったとされ（『類聚国史』）、発掘調査の出土遺物から11世紀頃までは国分寺として維持され機能していたとされる。<sup>26)</sup> 平成20年（2008）の磐田市による遠江国分寺塔跡の発掘調査にて、塔本塑像（頭部）が発見された。国分寺跡の塔本塑像としては、群馬県の上野国分寺跡に継ぎ全国2例目の発見である。<sup>27)</sup>

光禪寺に比較的近い現在の浜松市南区の頭陀寺は、貞観5年（863）に遠江国唯一の定額寺と

なっている。(『日本三大実録』) 定額寺には「官寺」、「準国分寺」的待遇が与えられ、地域の仏教の一大拠点であったことが推察される。頭陀寺には、現存こそしないものの、10世紀作で一木造の不動明明王立像と薬師如来坐像が伝わっていたとされ、旧浜松市中心部に伝わっていた数少ない古仏として注目される。

これらの地域以外にも、湖西市の浜名湖西北にあたる弓張山脈の大知波峠に10世紀から11世紀にかけての寺院跡(石垣をともなう礎石建物跡10棟・門跡1棟)が発掘されている。出土した密教法具から密教寺院の山寺である可能性が指摘される点、弓張山脈の最南端に12世紀の仏像群を有する普門寺が位置する点からも<sup>28)</sup>、この廃寺にも平安時代中期以前の古仏が存在していた可能性を考慮する必要があるだろう。

以上のことから、奈良時代から平安時代前期には、浜名湖北部の地域、現在の浜松市中心部、現在の磐田市、袋井市、湖西市域と、遠州地域の広範囲に渡って仏教文化が伝播していたものと推察される。政治・宗教の中心である国分寺はもちろん、定額寺や山岳地帯に開創された寺院等を介し、地域の人々に広く受容されたのであろう。現在に伝わってはいないが、制作年代を奈良時代や平安時代前期にまで遡る仏像が存在したことも想像にかたくなく興味深い。

ところで、静岡県内で平安時代の古仏が豊かに伝わるのが、旧伊豆国に属した県東部地域や伊豆地域である。金龍院(伊豆市)の不動明王坐像(10世紀)や千手観音立像(11世紀)、林際寺(河津町)の観世音菩薩立像等、制作を平安時代中期に遡る優品が残る。<sup>29)</sup> 特筆すべきは南禅寺(河津町)の26軀の仏像神像と23点の彫像断片からなる仏像群である。その数の多さはもちろん、9世紀から10世紀の古仏を含む点が注目され、9世紀後半の伊豆諸島の噴火に際し、中央政府と対応して造像されたものとの指摘もある。<sup>30)</sup>

この指摘のように、伊豆地域に平安時代前期・中期の仏像が数多く伝わる要因は、都から東進する通常の仏教文化の流れや国分寺や定額寺等を介した仏教文化の広がりとは一線を画すものである。遠州地域には、大知波峠廃寺跡等、仏像群の存在の可能性が指摘できるものを除けば、南禅寺のような大規模な仏像群の存在が断定できる寺院やその跡は確認できない。そのため、遠州地域に伝わる仏像は、伊豆地域とは対照的に、地域全体に広く点在している印象を受ける。また、その伝播は、南禅寺の仏像群のような外的要因にはならず、都から地方への人・物のゆるやかな動きによってもたらされた、典型的な例と言えるかもしれない。

なお、静岡県内では、旧駿河国に属した県中部地域にも平安時代中期の古仏が広く伝わっている。特筆すべきは、島田市の智満寺、静岡市の鉄舟寺<sup>31)</sup>、坂ノ上薬師堂や中野観音堂に、10世紀の千手観音が伝わっている点である。旧駿河国には、焼津市の法華寺、静岡市の霊山寺等、千手観音を本尊とする寺院が多い。遠州地域の主な寺院に伝わる本尊は、真言宗の寺院だけを見ても、摩訶耶寺は聖観音、岩水寺は地藏菩薩、西楽寺は阿弥陀如来、応賀寺は薬師如来等、偏りが見られず、幅広い尊像が各地でそれぞれに信仰されてきた様相が伺える。

## (2) 平安時代後期以降

平安時代後期以降の院政期には、全国的に仏像の造像の受容が高まり、仏像が大量生産されるが、遠州地域もその例外ではないものと思われる。県指定文化財以上の作例だけを見ても、浜名湖北部の摩訶耶寺や華蔵寺、浜名湖西側の応賀寺、現在の磐田市や袋井市域の宣光寺や西楽寺等、遠州地域の広範囲の寺院に12世紀の仏像を確認することができ、その多くが定朝様式を示す仏像であることが特筆される。それらは、割矧造や寄木造といった新彫法が巧みに用いられ、作風としても端正で所謂都ぶりであることも特徴的である。また、不動十九観を示しながらも起伏に富んだ面相部や前方に踏み出す脚部に写実性と力強さを兼ね備えた摩訶耶寺の不動明王立像、正統な定朝様式を示しながらも玉眼が嵌入される西楽寺の阿弥陀如来及び両脇侍坐像等、平安時代後期から鎌倉時代への過渡期を示す作例も散見される。

鎌倉時代の作例としては、応賀寺の薬師如来坐像や毘沙門天立像、大福寺の薬師如来立像や金剛力士立像、岩水寺の地蔵菩薩立像等、平安時代後期には及ばないものの比較的多くの作例が伝わる。特に岩水寺の地蔵菩薩立像は、慶派仏師・運慶作の手による基準作として知られる。全国に約50点が確認される裸形着装像の作例の1つで、像内納入品の存在も確認されている。その他、慶派仏師につながる可能性を含む作例として、像内から「寛元」の銘が見つまっている秋葉寺の金剛力士立像をあげることができる。(図6)しかしながらこの仏像は、明治時代に新城市の熊野神社から移されたものであり、遠州地域に制作当初から存在したものでない点を考慮しなければならない。



図6 金剛力士立像(秋葉寺)

南北朝時代以降の作例としては、方広寺の釈迦如来及び両脇侍坐像をあげることができる。(図7)この三尊像は、院派仏師、院吉・院広・院遵によって制作された優品で、遠州地域を代表する仏像の1つであるが、茨城県の清音寺より明治時代になって移されたものである点に留意が必要である。



図7 釈迦如来坐像(方広寺)

長楽寺の馬頭観音坐像は、従来鎌倉時代後期の作とされてきたが、やや四角い頭部と肩幅の広い体幹部が大小の箱を積み重ねたように見える点、脚部の衣文線が深くうねるように複雑に表現されている点から、南北朝時代まで降る可能性もある。全体としては、平安時代後期、鎌倉時代に比べ、南北朝時代の作例は少ないように思われる。

静岡県内では、旧伊豆国にあたる県東部地域や伊豆地域に、伊豆山神社(熱海市)に宝冠阿弥陀如来坐像、長谷寺(下田市)に阿弥陀如来坐像等、定朝様式を示す12世紀の優品が伝わる。ただし、先にも述べたように、伊豆地域は平安時代中期以前の仏像が数多く見出されており、定朝様式を示す仏像の占める割合としては低い印象を受ける。また、運慶作の阿弥陀如来坐像、不動明王立像、毘沙門天立像で名高い願成就院(伊豆の国市)を筆頭に、実慶作の阿弥陀如来及び両脇侍坐像が伝わる長源寺(函南町)、同じく実慶作の大日如来如来像が伝わる修禅寺(伊豆市)等、慶派仏師の作例やそれに習ったと見られる作例が伝わる寺院が、東国の名に相応しく点在する。<sup>32)</sup>これらの鎌倉時代の仏像の伝播は、幕府やその要人との政治的なつながり、政治の中心となった鎌倉との地理的關係によってもたらされたものであり、鎌倉から離れた遠州地域には見られない傾向である。

旧駿河国にあたる県中部地域にも、鵜田寺(島田市)の薬師如来坐像、一乗寺(静岡市)の宝冠阿弥陀如来坐像等、12世紀の定朝様式を踏襲した作例が散見される。ただし、その割合は、遠州地域ほど高いものでないように思われる。特筆されるのは瑞林寺(富士市)の地蔵菩薩坐像が運慶の父・康慶作であること<sup>33)</sup>、新光明寺(静岡市)の阿弥陀如来立像が、西方寺の阿弥陀如来立像(快慶作)と作風に近似すること等<sup>34)</sup>、慶派につながる作例が点在する点であろう。静岡県内でも、旧遠江国、旧駿河国、旧伊豆国と東進するに従って、慶派仏師や慶派につながる作例が多くなる点は、鎌倉との距離をふまえれば合点がいくものである。

このように、旧駿河・伊豆国に属した地域にそれぞれに伝わる仏像には、特徴的な傾向を見出すことができるが、遠州地域はそのいずれにも類似せず、その特徴や傾向にも顕著なものがなく判然としない。

ただし、西隣の東三河地域に目を向けると、事情が異なる。旧三河国に属した東三河地域の



豊橋市には、遠州地域との国境付近の山岳地帯に、普門寺、赤岩寺、正宗寺等の寺院が点在する。特に普門寺は、定朝様式を踏襲した釈迦如来坐像や阿弥陀如来坐像、腰周りに重量感があり動性が控えめな四天王立像等を中心とした12世紀の優れた仏像群を有する。(図8)<sup>35)</sup>



図8 普門寺の平安時代の仏像群(左から多聞天立像・広目天立像、釈迦如来坐像、阿弥陀如来像)

同じく豊橋市の東観音寺の阿弥陀如来坐像、新城市の林光寺の薬師如来坐像等、定朝様式を示す優品が地域全域に点在しており、遠州地域に伝わる仏像の傾向と類似する。また、豊橋市の赤岩寺の愛染明王像、新城市の熊野神社の阿弥陀如来坐像や聖観音等、平安時代後期の作例には及ばないものの鎌倉時代の作例も豊富に伝わる。さらに、熊野神社像については、慶派仏師・行慶、鏡慶の手によるものであり<sup>36)</sup>、わずかながら慶派仏師の作例が確認できる点も遠州地域の傾向に近いものと言えよう。

普門寺は、歴史的には応長元年(1311)の大福寺(浜松市北区)御堂供養の大曼荼羅供に、摩訶耶寺や鳳来寺(愛知県新城市)とともに参加するなど(『大福寺御堂供養記』寛永12年(1635))、古くから遠江国の寺院とも交流があったと推察される。また、12世紀の不動明王及び二童子立像が、摩訶耶寺の不動明王立像と作風の類似点が多く(図9)、美術史の側面からも両寺院の深い関係性を想像せざるを得ない。



その他、応賀寺(湖西市)の毘沙門天立像の像内願文(文永7年(1270))に、真福寺(愛知県岡崎市)に関する記述が確認できる等、遠江・三河両国の寺院同士のつながりは、かなり以前から比較的広範囲に渡っていたことが伺える。

図9 不動明王立像の比較(左:普門寺/右:摩訶耶寺)

こうした遠江と三河の交流は、遠江国分寺と三河国分寺を結ぶように浜名湖の南部・北部それぞれに東西の交通路が古くから開けていたこと、三遠国境の山岳地帯を東西に結ぶ里道が数多く見つかっていることから、その密度や重要度の高さが伺える。さらに、遠州地域に伝わる主な仏像は、浜名湖北部地域に開かれた交通路に沿うように点在する他、浜名湖を見渡せる湖畔や山岳地域等に点在することが分かる。(図10)こうした遠州・三河の文化的つながり、浜名湖を中心とした文化的な広がり、それぞれの地域に伝わる仏像の特徴や傾向の類似の背景にあるようにも思え、興味深い。

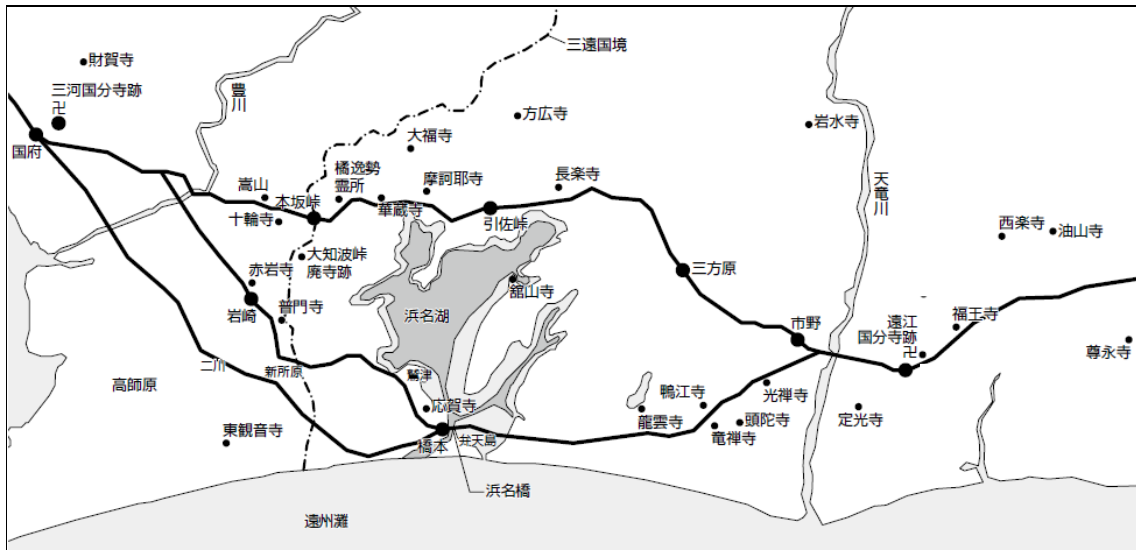


図 10 三遠国境の人的・物的な流れの概略

#### 4. おわりに

本論では、「みほとけ展」で紹介した仏像を主要な例としてあげながら、その個々の特徴や遠州地域に伝わる仏像の傾向を概観した。

平安時代前期以前の仏像については、存在した可能性は大いにあるものの現在に伝わる数は少ないこと、平安時代後期以降の仏像については、定朝様式を示す仏像の割合が圧倒的に高く、鎌倉時代の仏像（一部は慶派仏師の作）も比較的豊富に伝わる大きな傾向である。加えて、都からの正統的な流れを汲んだ作例が多いこと、伝わる仏像の尊像に目立った偏りがないことも特徴的である。

このような傾向は、同じ静岡県内の旧駿河・伊豆国に属した地域の独自色の強い傾向とは一線を画す一方、旧三河国に属した東三河地域との類似が見られた。その背景には浜名湖を中心とした遠州・三河地域のいにしえからの深いつながりによるものであることが推察される。遠州地域は三河・遠江両国分寺の狭間に位置し、都で栄華を極めた仏教文化は、両国分寺はもちろん、定額寺、山岳に建立された数多くの寺院等を介し、地域全体へと伝播したはずである。そのことは、中央からの正統的な流れを汲む仏師の手によることを想像せざるを得ない作例、各時代の潮流の先端をいく作例等の存在が如実に物語るし、正統的な仏像を地方における在庁官人級の有力者が平安時代後期の時点で受容できたとされる背景も、遠州地域の仏教文化の広がりや仏像の傾向を考える上で考慮すべきだろう。

ただし、ここで留意すべきは「みほとけ展」で紹介した仏像は、遠州地域に伝わる仏像を網羅したとはいえず、本論で触れた仏像も一例にすぎないことである。また、「みほとけ展」の特質上、遠州地域はもちろん、東三河地域に伝わる仏像については一定の考察ができた反面、静岡県中部地域の仏像については考察が希薄である点が否めない。今後、遠州地域の未調査・未確認の仏像についても調査・研究を進め、東三河地域に加えて駿河国の仏像にも考えを及ぼしながら、遠州地域の仏像の特色や傾向について、その精度を高めていきたい。

さらに、遠州地域への仏教文化の伝播や広がりについては、仏像が伝わる寺院の位置関係を基本線に、国分寺や定額寺、山岳寺院の存在、地形や交通路等をもとに推察してきたが、その様相は未だ判然としないのが現状である。ただし、遠州地域と東三河地域の国境付近の特徴的

地形で、主要な仏像が伝わる寺院の中心に位置する浜名湖という水辺は、この地域の仏教文化を考える上で非常に興味を掻き立てられる存在である。

湖周辺に仏教文化が栄えた例として現在の滋賀県、近江国の琵琶湖が挙げられるのは言うまでもない。琵琶湖は東西南北の各地域に9世紀-10世紀をはじめ、数多くの古仏が伝わる。10世紀に天台宗が勢力を伸ばし、各地に寺領を広げ、荘園を経営しながらさらに寺院を建立し、仏像を安置したものとされる。特に湖北の己高山は古くから特殊な霊山とされ、行基や泰澄が寺院を開いた他、最澄も修業したことが『己高山縁起』（応永14年〔1470〕）に記され、一大仏教文化圏を形成していたとされる。<sup>37)</sup>

浜名湖もその西部や北部に深い山々を頂き、行基開創と伝わる真言宗の寺院をはじめ、山中で修業することを重視する密教系の山寺が散見される点<sup>38)</sup>が琵琶湖と類似する。また、院政期、院・女院、院の近臣の荘園が多数置かれた遠州地域では、荘園経営を介して仏教文化がもたらされた側面を考慮すべきとの指摘があり<sup>39)</sup>、荘園経営を介して伝わる仏像が存在する可能性を指摘できれば、さらなる琵琶湖地域と類似点を見出せるかもしれない。

東三河・西三河地域においても、かつて太平洋を望んでいたとされる東観音寺（豊橋市）、矢作川やその支流との関係性が想像される瀧山寺（岡崎市）等、海や川といった水辺とのつながりが指摘される寺院の例が散見される。<sup>40)</sup> 琵琶湖周辺の地域はもちろん、全国各地の水辺につながる寺院や仏像の事例にも考えを及ばせ、遠州地域の事情と比較・検証することを通して、浜名湖を中心とした遠州地域の仏教文化の様相をより浮かび上がらせることを今後の研究課題としたい。

#### 〔註〕

- 1) 『浜松市美術館開館50周年・中日新聞東海本社40周年 みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展一』 みほとけ展実行委員会 2021年
- 2) 島口直弥「みほとけのキセキー遠州・三河の仏像とその魅力ー『浜松市美術館開館50周年・中日新聞東海本社40周年 みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展一』みほとけ展実行委員会 2021年、pp. 88-97
- 3) 磐田市による遠江国分寺塔跡の発掘調査（2008年）にて、塔本塑像（頭部）が発見された。（『特別史跡遠江国分寺跡一本編一』磐田市埋蔵文化財センター・磐田市教育委員会 2016年、pp. 218-220）
- 4) 岩佐光晴「日本彫刻研究における木彫像の樹種同定の意義一一木彫像成立の問題を中心に一」『成城学園創立100周年記念シンポジウム報告書 仏像の樹種から考える古代一木彫の謎』東京美術 2015年、pp. 37-38
- 5) 島口直弥「作品解説」『浜松市美術館開館50周年・中日新聞東海本社40周年 みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展一』みほとけ展実行委員会 2021年、p. 104
- 6) 日比野秀男「第1章 概説ー静岡県の彫刻」『静岡県の文化財ー彫刻一』静岡県教育委員会 1978年、p. 51
- 7) 『浜松市史1 古代編』浜松市 1968年、pp. 349-352
- 8) 岩佐光晴「遠州地域への定朝様式の伝播をめぐって」『浜松市美術館開館50周年・中日新聞東海本社40周年 みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展一』みほとけ展実行委員会 2021年、p. 16
- 9) 岩佐、前掲書（8）p. 21
- 10) 大宮康男「西楽寺阿弥陀三尊像について」『史迹と美術 第779号』史迹美術同友会 2007年、pp. 333-334

- 11) 大宮康男「西楽寺の本尊」『浜松市美術館開館 50 周年・中日新聞東海本社 40 周年 みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展一』みほとけ展実行委員会 2021 年、pp. 98-99
- 12) 奥健夫「奈良の鎌倉時代彫刻」『日本の美術 第 536 号』至文堂 2011 年、pp. 21-22
- 13) 大宮、前掲書 (10) p. 335
- 14) 岩佐、前掲書 (8) p. 21
- 15) 大宮、前掲書 (10) p. 335
- 16) 岩佐、前掲書 (8) p. 21
- 17) 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第 16 卷〈解説〉』中央公論美術出版 2019 年、pp. 152-154
- 18) 奥健夫『『五境の良薬』を納める地藏菩薩像とその周辺』『仏教彫像の制作と受容ー平安時代を中心にー』中央公論美術出版 2019 年、pp. 126-136
- 19) 奥健夫「裸形着像の成立」『仏教彫像の制作と受容ー平安時代を中心にー』中央公論美術出版 2019 年、pp. 325-327
- 20) 山本勉「普賢菩薩像」『日本の美術 第 310 号』至文堂 1992 年、pp. 64-69
- 21) 『引佐町史下巻 文化財編』引佐町 1993 年、pp. 1356-1364
- 22) 岩佐、前掲書 (8) p. 19
- 23) 山岸公基・塩澤寛樹・堀恭子「寛元在銘の静岡・秋葉寺 (愛知・巢山区伝来金剛力士立像)」『愛知県史研究 第 9 号』2005 年、pp. 143-153
- 24) 大河内智之「仏像の移動とその実態ー彫刻資料から地域史を読み解くためにー」『和歌山県立博物館研究紀要 第 19 号』和歌山県立博物館 2013 年、pp. 1-18
- 25) 『建築を表現するー弥生時代から平安時代まで』奈良国立博物館 2008 年 p. 32
- 26) 『磐田の文化財』磐田市教育委員会 2009 年、pp. 72-73
- 27) 前掲書 (3) pp. 218-220
- 28) 後藤建一『日本の遺跡 22 大知波峠廃寺跡ー三河・遠江の古代山林寺院』同成社 2007 年) pp. 3-19
- 29) 『リニューアル 1 周年記念 特別展 伊豆の平安仏ー半島に花ひらいた仏教文化』(上原美術館 2018 年) 他、田島整主任学芸員による調査により、数多くの平安時代の古仏が見出されている。
- 30) 田島整「静岡県河津町・南禅寺の平安時代仏像群についてー尊像構成から見たその性格ー」『鹿島美術研究 年報第 3 7 号別冊』公益財団法人鹿島美術財団 2020 年、pp. 23-33
- 31) 鉄舟寺像はその古様な作風から制作時期を奈良時代後期から平安時代前期にまで遡るとの所見もある。(浅湫毅「古代檀像の一遺例ー静岡鉄舟寺の千手観音立像」『京都国立博物館学叢』京都国立博物館 2002 年、pp. 67-77 )
- 32) 『ふるさと静岡県文化財写真集 3 彫刻・工芸品・歴史資料・考古資料編』(静岡県教育委員会 1993 年) にて静岡県に伝わる仏像の概略が網羅的に紹介されている。
- 33) 中村康「修理報告 静岡 瑞林寺木造地藏菩薩坐像」『京都国立博物館学叢』京都国立博物館 1989 年、pp. 145-153
- 34) 根立研介「静岡・新光明寺の木造阿弥陀如来立像」『仏教芸術 183 号』毎日新聞社 1989 年、pp. 118-119
- 35) 山岸公基「愛知・普門寺の平安時代の仏像」『浜松市美術館開館 50 周年・中日新聞東海本社 40 周年 みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展一』みほとけ展実行委員会 2021 年、pp. 24-34
- 36) 山岸、塩澤、堀、前掲書 (23) pp. 143-153

- 37) 西川杏太郎「近江の仏像」『日本の美術 第224号』至文堂 1985年、pp. 17-21
- 38) 岩原剛「第1章 普門寺旧境内の概要」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第141集 普門寺旧境内—総合調査編—』豊橋市教育委員会 2016年、pp. 1-10
- 39) 岩佐、前掲書(8) p. 22
- 40) 上川通夫「中世山寺の基本構造—三河・尾張の例から—」『愛知県立大学日本文化学部論集 第6号(歴史文化学科編)』2014年、pp. 8-17

## 附記

本論は、浜松市美術館企画展「みほとけのキセキ—遠州・三河の寺宝展—」における遠州地域の仏像の調査研究を土台としている。展覧会とそこに至る調査研究の成果を本論に整理集約することを通して、遠州地域の仏像や仏教文化の広がりについて新たな研究課題を見出すことができた。新たな研究課題に向け、さらなる仏像の実地調査を重ね、調査結果を分析することで、遠州地域の仏像の傾向や仏教文化の広がりの様相について、探究していきたい。

なお、仏像や寺院の実地調査にあたっては、「みほとけ展」出展寺院の皆様よりご厚誼を賜り、岩佐光晴氏(成城大学教授)、山岸公基氏(奈良教育大学教授)、田島整氏(上原美術館主任学芸員)からは、貴重なご指導やご助言を頂いた。文末ではあるが、お名前を記して感謝の意を捧げたい。